

經濟論叢

第(十)卷 第二號

人間疎外の論理(上).....	平井俊彦	1
政府部門の理論的考察(-).....	池上惇	14
經濟調査の資料的限界.....	斎藤一郎	26
「生産価格」の消滅過程.....	芦田文夫	38
世界恐慌論における二類型(上).....	重田澄男	55

昭和三十六年八月

京都大學經濟學會

人間疎外の論理(上)

平井俊彦

一 はじめに

現代社会における人間の存在状況をあらわすのに、「人間の疎外」*man-alienation* だとか「自己疎外」*self-alienation* という言葉が、最近ことに用いられるようになってきた¹⁾。わが国でも、近ごろいろいろの分野の人々がこの問題の究明に参加するようになった。講座『近代思想史』のなかで、「疎外の時代」が二巻にもわたって編集されたり、さらに雑誌でもシンポジウムがさかんにおこなわれている。また、ごく一般の人々の手に入るものとしても、新書版でペッペンハイムの『近代人の疎外』が出ているし、ごく最近には務台理作教授の『現代のヒューマニズム』が公刊された。そのほかに、マルクスに関し、あるいは実存主義とのかかわりのなかで、この問題が問われている段になると、とても一つ一つの著書をここで数え上げることはできないくらいである。この問題ほど、哲学・神学・心理学・社会学・政治学・経済学などきわめて多方面から考察されたものも数少ないのではなからうか。というのは、それほどまでに「人間の存在状況」の問題は、あらゆる人間にとって普遍的な問題であり、ことに今日のような現代社会の発展が急速におこなわれる時点では、一般に問われるべき問題であるからである。マルクスの

言葉をまつまでもなく、「人間にとって根本的なことは人間そのものである」。だが、その反面において、これほど解決の困難な問題もないのであって、ある意味でとらえどころのないものともいえよう。というのは、一つの立場または一つの個別科学からこの解決にむかうには、人間、それも現代の人間存在という問題は、あまりにも大きなことがらであり、複雑すぎるからである。だからといって、われわれはこの問題の前を素通りするわけにはいかない。ここに、一つの難関があるのだ。ことに、経済学が社会科学であり、すぐれて人間科学であるかぎり、どうしてもなんらかの形で、こうした基本的な課題にとり組まねばなるまい。

このようなわけだから、もちろん、わたしはこの問題に対して全体的な・包括的な視野からとも解答できるはずはないし、また、経済学の立場からしても充分な答を用意できそうにもない。けれども、この問題に多少とも関心をもつものとして、わたしなりにこれに対して接近する通路をつけてみたいとおもう。そして、同時にまえにわたしが『ルカーチにおける社会存在の論理』のなかで提起した、人間疎外に関するいくつかの問題を、もう一度検討しなおし、補足してみたい、とおもうのである。

- (1) これまで日本語として市民権をもっていなかった「人間疎外」という言葉は、一体どういことなのか、はたしてこの言葉がその内容を表現するのにふさわしいものであるかどうか、きわめて疑問である。だが、いまここで、この言葉のせんまくをする余裕はない。ただここでは、このカテゴリーの由来だけをべておこう。この言葉は、英語の *alienation* または *estrangement*、ドイツ語の *Entäusserung* または *Entfremdung* の訳語である。そして、本来つぎのような意味でつかわれたようである。「*alienation* はイギリス経済学では商品の譲渡 *Veräusserung* をあらわすのにつかわれるとともに、ほとんどすべての自然法的社会契約説では、契約によって成立した社会にたいして本来的自由を喪失すること、これを委託し、譲渡することをあらわすのに用いられる。わたしの知るかぎり、哲学的には *Entäusserung* はすでにフイヒテの用いたことばで、フイヒテは客観の定立が主観の譲渡であって、客観は『外化された』理性 *eine (entäußerte) Vernunft* としてつかまれている。

——Fichte : Grundlagen der gesamten Wissenschaftslehre. 1794. Werke I. S. 360.] Georg Lukács : Der junge Hegel, Über die Beziehungen von Dialektik und Oekonomie, Europa Verlag, S. 682.

二 人間疎外の状況

現代社会のなかで人間の非人間化の状況つまり「人間疎外」の状況は、きわめて複雑であり、多様である。では、どのようにか。こうした人間の疎外現象について、さきにあげた務台教授の『現代のヒューマニズム』¹⁾に要領よくまとめられてあるので、これによって、のべてみよう。

まず第一に、マルタスの「労働の疎外化」であって、労働の成果を直接生産者が享受できないという、所有関係から生ずる疎外である。ただ、このばあいそのかぎりでの疎外は生産三段の私有のあるところでは、すべて多少とも発生するものであるが、ことに賃労働と資本関係が全社会を支配する社会では近代的大工業と分業が極度に発展し、労働の生産物が商品化されるや、労働者と労働生産物の分離、労働そのものの抽象化が大きくなって、疎外現象が最高度に達するのである。第二に、近代市民社会の成立にもなって生ずる人間の疎外で、個人と社会との分裂、共同体の解体に伴う個人のアトム化という現象がある。共同体が解体してはじめて、個人と社会とが形成されるのだが、この個人そのものにも、かれがつくる社会そのものにも個人主義が貫徹している。そこで生ずる個人も企業もすべて自己の利己的目的のみを追求して、それら相互の間に敵対関係のみが支配し、人間は完全に孤立化しているのである。ついで第三に、社会の発展にもない、個人から分裂した社会機構は、主体化して人間をかえって限定するはたらきをもつ。マス・コミまたはマス・プロによる人間の受動化や画一化がこれである。主体性をも

つものは人間ではなくて巨大な宣伝や報道であり、しかもこれが人間の働きをまったく静観的なものとする。「このように受動化され、画一化されることは、もはや主体的に自分で考えたり、判断する必要があることをしめすわけで、そういうむずかしいことは誰かにまかせておけばよいことになる。」ここにも、疎外の重大な側面があらわれる。第四に、テクノロジの発達、技術革新による人間疎外が問題となる。この点はいわば先の大量生産を作り出した原因ともいえるのであって、したがって同じような現象がみられる。すなわち、人間は本来機械をつくりだしておきながら、この機械体系がそれ自身で合法的に動き出すと、機械が主人となり、人間はこれに奉仕する下僕の地位になり下る。それどころか、全面的に人間性までが機械化され、画一化されてしまうのである。第五に、現代の政治における人間の疎外についていえば、官僚制による疎外と権力による疎外が、考えられる。近代社会において政治が複雑になり、行政事務が専門化されると、どうしても合理的政治機構が生れる。組織のあるところでは大なり小なりの組織の機構があるが、それが固定化して流動性を失いがちであって、かえってこれが人間を束縛する既成体となってしまう。ことに現代国家の支配機構はますます複雑になり、政治にはつねに権力が結びついてくるので、この官僚制はいよいよ硬化するのである。ところで、こうした官僚制度や権力は全体の利益に合致しているならば問題はないが、特定の少数者が自己の私的利害に結びつけるならば、かならず権力による弊害が生ずるにちがいないのである。

もちろん、単に疎外現象がこれだけにつきるとは考えられないが、ほんその主なものはいいてるのではないだろうか。このように、経済現象にも政治現象にもまたイデオロギーにも、すべてにわたって人間疎外の現象が侵透している。そして、それぞれの生活領域での疎外現象は、すべてそれぞれちがった形であらわれ、その一つ一つ

はきわめて特殊であるかのようにある。したがって、これまでそれぞれの個別科学は自己の対象領域内部での疎外現象のみ追求してきた。社会諸科学は経験科学であるかぎり、日常の経験的世界のなかにあらわれる現象を追求することは、きわめて重要な課題であり、これなしにはこの問題に関する実り多い成果を期待することはできない。また、一般的な疎外の問題も特殊な対象領域での現象を分析した上でのみ、有効に提起できるであろう。だがその反面で、これらの現象をその底で貫ぬいている論理をとらえることも、それに劣らざる重要な試みである。これらの現実の疎外についてうかがひ上げる表象について、全体的な考察をすすめるひとびとの多くはその究極の原因を現代の社会問題に求めている。たとえば、バッペンハイムは、人間疎外の意識から技術へ、そして政治領域へというように疎外現象を追求して、最後にそれらを社会構造に帰しているし、あるいはルカーチは資本主義的商品生産社会における物象化を出発点として、順次に上部構造である政治過程そしてイデオロギーにこれを展開させていくのだが、いずれも経済社会を基礎としていることはかわりがない。そのかぎりでは、これらの方向は、いずれも正しい。とともにも、経済過程それも生産の局面において、人間疎外論の核心をすえることが、きわめて重要であろう。というのは、人間をして真に人間たらしめるものこそ、この生産的実践という人間の基本的営みであり、それとともに、なによりもここにおいてこそ、人間疎外の事実がきわめて端的にあらわれるものだからである。したがって、自己疎外からの人間の解放はまず、第一次的に基本的に生産過程における解放であるといえよう。こうした観点から、わたしたちは現実社会における人間疎外の基礎を、経済社会の構造それも生産過程においてとらえたいとおもう。

ところで、人間疎外を生活領域の底辺にまで下って考察するばあい、人間と自然との関係から生ずる自然的疎外と、人間と社会との関係から生ずる社会的疎外とにわけられる。もともと、両者はすべて人間の生産行為そのもの

に由来するものであり、分業によつて媒介されるものであって、けつしてばらばらにとらえるべきものではない。だが、人間はこの自然なる大地に生存し、道具によつて自然を作りかえる主体として生産物と対立し、さらに一定の社会的關係に組みこまれた人間として、社会条件に規制され、これと対立するものである。一つは人間の技術過程から生ずる問題であるし、他は所有關係にかかわるものであって、現実の人間は、二重の規定をうけてあらわれ、さきにみた現在社会における人間疎外の状況のなかで、一つはテクノロジーの問題としてあらわれ、もう一つは社会構造の問題として提起されているが、このことは生産過程においてもっとも端的に表現されるのである。この意味においても、生産過程において生ずる疎外のなかに、現代疎外論の問題性が象徴的にしめされるのではないだろうか。とともに、ここではこの二つの疎外の規定がどのような論理的構成をとるかが、問題となる。もし、この一方のみが強調されれば社会体制ぬきの技術論や機構論におちいり、技術革新や官僚制度から生ずる疎外のみが前面に出るのであるうし、また他方のみを立てれば、階級關係や所有關係だけが問題の焦点となつて、近代的技术や機構から生ずる疎外が正しくつかまれないであろう。ところで、疎外の現実はその結合であり、両者が密接にむすびつて人間疎外の状況をつくりだしている。われわれはこのような現実の疎外状況の総体を、もつともエレメンタルなものから論理的に分析してみよう。こうして、資本主義的商品構造のなかでこの論理規定をたしかめてみたい。

(1) 務台理作教授はことに戦後するどい生き生きとした現実感覚に基いて思索されているわが国では数少ない思想家の一人である。務台教授はすでに『第三ヒューマニズムと平和』（昭和二十六年）のなかで、現代ヒューマニズムをルネッサンス・ヒューマニズムおよび市民的ヒューマニズムに対立させて第三ヒューマニズムとして提起されて以来、わたしは注目していた。その後十年のち、『現代のヒューマニズム』を公にされたのだが、この書物にはこの間の同教授のはげしい思索過程がにじみでているように私には感じられる。すなわち、以前には主として実存主義的立場から人間存在の問題が立てられていた。というより

は、マルクス主義と実存主義とを市民社会批判という現代危機意識のもとにくくって、現代ヒューマニズムの問題が提起されていた。この立場では、マルクスとキェルケゴールは「背中合わせになっているようにみえるにかかわらず、市民社会に対する徹底的な批判と、過激な人間解放を志向している点で一致している」と、いうことになる。(『第三ヒューマニズムと平和』二一ページ)——この書物にたいする寸評について、わたしはかつて、「フオイエルバッハと市民革命」(『経済論叢七二巻四号、二八年一〇月)四二ページで論じたことがある)ところが、その後『哲学概論』(昭和三年)のなかで、人間の存在の構造を社会的・歴史的条件と個体的・実存条件との二重構造のなかでとらえられ、人類共同体的ヒューマニズムが二つを結び紐となった。このたびの書物ではむしろ、個体的条件よりは社会的条件への方向がより多く強調されており、個体的存在の問題を社会的存在の中で解決しようとする方向が提示されている。この意味でわたしは、この著作が単に現代のヒューマニズムの問題に一般的に答えるという以上のものを、つまり著者の生動的な思索のあとを読みとりたい。そして基本的にわたしもこの立場に立ちたいとおもう。この問題について、別の機会に論じてみたい。

ここでの論点に関する項は、『現代のヒューマニズム』(岩波新書)のなかの第三論文「人間疎外とヒューマニズム」での「人間疎外の諸形態」を参照。

三 疎外の自然的基礎と社会的条件

わたしは以前に『ルカーチにおける社会存在の論理』を問い、そのなかで社会存在の根拠を生産的活動としての人間労働に求め、この労働を軸として人間と社会とがそれぞれ自ら生成し発展しながら分裂し対立する姿を、資本主義的商品生産社会にそくして描きだした。このばあいの人間労働の弁証法に対するわたしの見方は、基本的には変わらない。ただ、前の論文で人間をつつむ社会の客観的構造——主体としての社会の論理——という側面からみたのに対し、ここでは主に社会を構成する主体としての人間の存在構造の側面から、この問題を追求したい。

ところで、生産過程における人間疎外の論理を問うとき、まず、第一次的には人間と自然との基本的関係をとらえ、そのうえでさらに人間と社会との関係をあきらかにする必要があるだろう。これは現実の人間疎外の形成の論理的順序であるとともに歴史的順序である。マルクスが『経済学・哲学手稿』の「疎外された労働」のなかで、人間と自然との関係を疎外の第一規定として、したがってもつともエレメンタールな規定としておさえているのも、わたしはこのような意味で理解している。すなわち、現実の人間の実存条件は自然であり、この感性的自然のなかで人間は身体をもつた存在として生存する。なによりも、自然は人間がそのなかで活動する土台であり、生活する素材である。「労働者は、自然がなければ、感性的外界がなければ、なにもものをも作り出せない。それは、かれの労働が、それによって実現され、そこにおいて活動し、そしてそれによって生産する素材である。」ところが、人間も本来自然と一体であり、それ自身も自然であったのだが、この人間が自然と分裂するのは、ほかならぬ、自然に働きかけ、自然を作りかえ、こうして自己自身を再生産することによるのである。このことを自然の側からいえば、本来自己の内部にあった自然的二分肢としての人間が自己から分裂する。ここでは、人間は創造的な主体である。人間はしだいに自然を征服する。人間に対立する自然はもはや単なる自然でなく、労働対象としての自然であり、直接的でなく媒介的である。こうして生産を媒介として人間と自然とは分裂する可能性があたりえられる。

ところが、ここでこの生産行為によって人間と自然との分裂が生ずるといっても、いずれもこれは人間の形成であり、実現である。ヘーゲルのようにこれを、自己を自覚する精神のはたらきとみれば、人間は自らの労働によって自然に働きかけ、これを対象化することなしには自己を自覚できない。すなわち、自己の労働を客観化しこれと相對することによって、人間は対象のうち自己をみるのである。人間と自然との物質代謝の過程からみれば、人間

は、自然から労働生産物を作り出すことによつて、自己の欲望を充足し、肉体的生存の手段をうるのである。こうして、人間は自らを再生産するのだが、同時に「人間自身は、かれらが生活手段を生産しはじめるやいなや、自分を動物から区別しはじめ」⁵⁾のである。したがつて、労働による自己実現または、生活の維持というポジティブな契機をぬきにしては、この問題を正しくとらえることはできないであろう。より一そう正確に言えば、人間はこの対象物を媒介としてポジティブになるとともに、また、活動を外在化し、これに對立するというネガティブな契機をもつものとしてとらえねばならない。もしそうでなければ、人間の生成もなければ発展もないのであつて、人間が真に人間として実現していくためには、欲望を充足して自己を再生産していくには、実はこうした契機を媒介することによつてこそなのである。こうして人間も自然も、それぞれ自己の姿をかえ発展していく。ルフェーブルのいうように、「かれは自分の欲望にあわせて自然を加工しながら、その活動のなかで自らを變容し、そして自分の新しい欲望を創造する。かれはもろもろの対象、生産物を創造しながら、みずからを力として形成しそして把握する。かれは、じぶんの行為に課した諸問題を解きながら、進歩していく」⁶⁾のである。

このばあい、人間と自然との關係に特徴的なことは、これまでたびたび主張されてきたように、人間は自然に對して目的を意識して労働するということである。このように目的意識的であることによつて、人間は生産過程において道具を使用して自然と對立する。スミスのえがく原始社会においてすでに、人間が弓矢をもつて狩猟する労働があるのであり、人間が生産力を拡大していく契機の一つはこの点にあるのである。このばあい、もとより労働は自己享受のためであり、自己の意図は労働において客觀的に實現されることから、疎外は生じない。むしろここでは、人間の行動の自由がある。この段階では人間は未だ自然のふところにあり、大地と素朴に關係してゐるにす

ぎない。人間と自然とは分離しているといつてもそれは同時に道具によつて再び有機的に結合している、したがつて両者は調和し、安らつてゐる、といえるだろう。疎外はむしろ主観と客観とがはつきり完全に分裂してしまふところから生ずるものなのである。しかし、人間が生産物を外に対象化し、労働手段を自己の外部に作り出し身体から離れるということは、疎外の可能性をあたえるものとして、疎外のポテンシャルな契機なのである。

このことは、自然と人間との間に道具ではなくて、機械が入つてくることによつて決定的となる。もとより、機械はさきによつた道具より一そう人間の合理性・創造性の結果であり、より合目的に生活手段を獲得する方法である。それは道具より一そう飛躍的に労働節約的に自然的素材を加工し、使用価値を作り出し、富を増大させる。それは人間の欲望の増大にもない、生産力の増大を結果し、人間生活の発展に寄与した。と同時にJ・S・ミルのいうように「従来なされたすべての機械的発明が、なびびとかの日々の労苦を軽減したかどうか、疑わしい。」⁷⁾ というのは、道具においては、人間は自由意志にしたがつてこれを自由に用いることができ、そこでは人間はきわめて能動的であり、人間は主体的であつたが、機械は人間が作り出したものでありながら、これは人間の手からはなれて独立するや、一つの客観的な有機体としてそれ自身の目的をもち、その目的にあわせて法的に運動するメカニズムとなる。三木清がいうように、「それは因果論と目的論との統一」である。本来的に人間と自然との物質代謝という目的のために作られた手段としての機械体系が、第三者として、独立し、それ自体が一つの目的となるのである。このようにして、手段と目的との顛倒が生ずるとともに、人間は労働過程において、自然にたいする働きかけの過程で、自然と引きはなされる可能性をもつといえよう。

ところが、人間と自然との間に物質代謝がおこなわれ、人間が自己を再生産する労働において、同時に人間は一

定、人間関係を形成する。ここに社会が発生し、そして個人と社会とは分裂する可能性をもっている。もつとも本源的に人間は自然の生産において共同していた。この意味で人間の生産は協働であり、家族においてみられる自然的分業である。マルクスが共同体でえがく人間の労働も元来こうしたイメージをもったものである。「そもそも生活の生産、すなわち、労働においての自己の生産と生殖においての他人の生活との生産は、それ自体一個の二重の關係となつて——一方では、自然的な關係、natürliches Verhältnis として、他方では、社会的な關係、gesellschaftliches Verhältnis として——あらわれる。ここに社会的というのは、どんな条件のもとにあるにしても、どんな様式においてであるにしても、またどんな目的のためであるにしても、幾人かの個人の協働、Zusammenwirken mehrerer Individuen といふことである。」⁹⁾この意味で人間は、本源的にその生存におよぶ共同存在 *Gemeinwesen* であり、その労働において協働するものである。マルクスは『資本論』で工場内部での結合労働、*vereinigte Arbeit* を見ているが、資本主義社会において疎外された形ではあれ、こうした共同存在はいたるところに經驗的に確かめられるであろう。そして類的存在なるカテゴリーもこの点にかかわらせてのみ、充分に理解できるのである。

ところで、分業はけつして共同体的分業にとどまるものではなく、これは欲望の増大や人口の増加にしたがつて社会的分業にまで発展する。このときにはじめて、家族は解体し、相互に相對立する家族へ社会が分裂し、共同体が個人へと解体する。ここでは、分業はもはやその直接的性格を脱して、社会的となる。「分業は、物質的労働と精神的労働との分化があらわれる瞬間から、はじめて現实的に分業となる。」¹¹⁾とともに、こういう分業の出現とともに私有財産が発生する可能性があらわれるのである。

直接生産者が共同体内部から独立して一個の自由な独立生産者となるや、同時に一定の分業關係に包摂される。

そこでは個人は自己の生産のために、自己の欲求を充足する私的労働をおこなうが、まさに自己の労働を対象化する過程で他者の欲求をも満足させ、また自己の欲求は他者の労働の生産物に依存せざるをえない。その結果、個人が意識するといなにかかわらず、社会的富は増大する。スミスの言葉をまづまでもなく、「労働の生産諸力における最大の改善と、またそれをあらゆる方面にふりむけたり、充用したりするばあいの熟練・技巧および判断の大部分とは、分業の結果であるようにおもわれる。」したがって、これをうらがえしにいえばこうである。「一國の生産諸力の発展程度をもっとも明瞭にしめすものは、分業がどの程度に発展しているかということである。」にもかかわらず、その内部で活動する個人にとって、この分業関係は疎外されているのである。「社会的な力 soziale Macht」すなわちいろいろの個人からなる分業によって制約された協働というものからうまれる倍加された生産力は、この協働自体が自発的でなく、自然的であるために、これら個人にとっては彼ら自身の結合された力としてあらわれずに、かれらのそとに立つ、いわば外的な強力となるのである。しかも、この強力がどこからきてどこへ去るかはかれらの知るところではなく、したがってかれらはもはやそれを支配することができない。むしろかえって、いまやそれは独特な、人間の意欲と実行とから独立な、そのみかによりもこの意欲と実行とを統制するような一序列の様相と発展段階とをたどりすすんでゆくのである。¹³⁾ここでは、個人はみづからが作り出した社会が、個人から独立して客観的・合法的に動いており、個人の特殊利害と社会の共同利害とが完全に分裂している。このことは、ブルジョア社会できわめてあきらかであって、そこでは私的利益を追求する個人が一定の社会関係に必然的に入るのであるが、この社会全体が個人にとって外的に、一般の利害をもつものとして客観的に動くのである。

このように、人間疎外の論理をとらえてみると、実はその自然と人間との関係において生ずる疎外の可能性を現

実化するの、は、社会的分業であることが、あきらかとなる。すなわち、もともと人間は自然を土台とし、これを素材とするかぎり「歴史は人間の自然史である」¹⁴⁾とともに、人間の生産物を媒介として一定の生産関係に入ることによって、歴史は社会史となるのである。ところが、二つはこのように分けて考えることはできないのであって、重なり合っているのである。すなわち、社会的分業はけつして、単に生産関係のカテゴリーにとどまらず、すぐれて生産力のカテゴリーをしめしているし、自然と人間との物質代謝の過程を媒介する生産手段そのものも、単に生産力にかかわるものではなくて、ある意味で生産関係の表現だからである。機械についてはいまでもなく、道具ですら一定の生産関係を前提として成立し発展するものである。のみならず、道具ごとに機械はそれ自体、分業の発展の所産であり、分業を内包しているものと考えられるであろう。わたしはつぎに、分業のカテゴリーの展開をば、それが普遍化した資本主義的商品生産社会のなかでたしかめてみたい。

- (1) 「ルカーチにおける社会存在の論理」(一)、(二)、経済論叢八〇巻一・三号、昭和三年七月・九月。
- (2) マルクスの『経済学・哲学手稿』のなかの論文「疎外された労働」を分析して、事実の概念的把握にしたがって、労働における疎外の論理を第一規定から第四規定まで論理的に整理されたのは、梯明秀教授の「四四年手稿断片『疎外された労働』におけるマルクスの哲学思想」上中下、(立命館経済学、一九五四年三巻四号、七号、四巻一号)である。
- (3) Marx: Ökonomisch-philosophische Manuskripte, aus dem Jahre 1844, Nationalökonomie und Philosophie, Verlag Gustar Kiepenheuer, S. 143. マン・エン選集、補巻四、三〇一ページ。
- (4) この論理過程は、ヘーゲルの『精神現象学』の「主と奴」のなかできわめてはつきりとのべられている。前掲論文「ルカーチにおける社会存在の論理」(一)、一ページ参照。
- (5) Marx: Die deutsche Ideologie. I. Feuerbach, Werke, Bd. 3, 1958, S. 21. マン・エン選集第一巻上二五ページ。
- (6) Henri Lefebvre: Le Matérialism Dialectique, Paris, 1949. 本田喜代治訳『弁証法的唯物論』一三九ページ。

- (7) この点については『資本論』二三章機械と大工業をも参照。
- (8) 三木清『技術哲学』三木清著作集第七卷二四二ページ、疎外論については、「労働過程」の分析がきわめて重要である。
- (9) Marx: Die deutsche Ideologie, S. 30. フラン・エン選集一巻上二六二ページ。
- (10) 内田義彦教授は、「この協働労働または集団的生産をマルクスの疎外論の基軸にされてつぎのようにならされる。「一般に労働過程が人間をつくり上げる場所であることに対応して、集団的生産(分業と機械をふくむ)は、本来人間の個人的制限をうちやぶって自由な主体たらしめる場所である。」(『経済学史講義』三七八ページ)。この点はきわめて重要であって、マルクスがすでに『ヘーゲル法哲学批判序説』でプロレタリアートを歴史の担い手としているのも、この結合労働を介してのみ、理解されよう。
- (11) Marx: Die deutsche Ideologie, S. 31. フラン・エン選集一巻上二八二ページ。
- (12) Adam Smith: Wealth of Nations. 大内・松川訳『国富論』(一)二八二ページ。
- (13) Marx: Die deutsche Ideologie, S. 34. フラン・エン選集一巻上三四二ページ。
- (14) Marx: Ökonomisch-philosophische Manuskripte, S. 194. 邦訳三五四二ページ。

(未完)